



毎月十五日発行 社会 宗像大祭 定価一年送料共 1000円

秋季大祭 祭近し



当社最大の祭典である「神郡宗像」郡民待望の秋季大祭が目前に迫ってきた。

津宮、中津宮の御神饗を奉載した御座船を先頭に午前九時半に大島港を出港し、

種々の神賑行事が連日奉納される他、境内全域には約二百の露店が軒を連ね三日間

Table with festival schedule: 九月三十日(金) 午後五時 総社地主祭, 十月一日(土) 午後六時 青宮祭, 十月二日(日) 午後八時 中津宮出御祭, etc.

Table with festival schedule: 九月三十日(金) 午後五時 総社地主祭, 十月一日(土) 午後六時 青宮祭, 十月二日(日) 午後八時 中津宮出御祭, etc.

「野球を愛する私たちは、あこがれの甲子園球場から全国の仲間へメッセージを送り出す。」

大島 目原 節子 暮れゆく西の空に「団の海渡りぬむ西の空に「団の海渡りぬむ西の空に」

終戦の御詔勅と原爆記念日

この日、痛ましくも散った原爆被災者たちの霊を鎮めよう。広島・長崎両市では慰霊式典がおこなわれる。

昭和二十年八月十五日、昭和天皇の御詔勅が、この核兵器に対する基本信念とは、大御心をしっかりと抱き続け、運動し続けていく義務があると思ふ。

五十一年近い原爆慰霊の式典は、この昭和天皇の大御心から外れて、米ソ対決の谷間に抗争の具に利用され、西歐の核は良いが共産圏の核は悪いといふもの、全く反対の立場のものとの対立

我々は国際潮流から置き去りにされる。しかし、将来に向かって、とくに核兵器に対する基本信念とは、大御心をしっかりと抱き続け、運動し続けていく義務があると思ふ。

五十一年近い原爆慰霊の式典は、この昭和天皇の大御心から外れて、米ソ対決の谷間に抗争の具に利用され、西歐の核は良いが共産圏の核は悪いといふもの、全く反対の立場のものとの対立

「野球を愛する私たちは、あこがれの甲子園球場から全国の仲間へメッセージを送り出す。」

大島 目原 節子 暮れゆく西の空に「団の海渡りぬむ西の空に」

赤間 池浦 千鶴子 日陰を恋ひるの間にとび込みて見上げる空の群青のろし

この日、痛ましくも散った原爆被災者たちの霊を鎮めよう。広島・長崎両市では慰霊式典がおこなわれる。

昭和二十年八月十五日、昭和天皇の御詔勅が、この核兵器に対する基本信念とは、大御心をしっかりと抱き続け、運動し続けていく義務があると思ふ。

五十一年近い原爆慰霊の式典は、この昭和天皇の大御心から外れて、米ソ対決の谷間に抗争の具に利用され、西歐の核は良いが共産圏の核は悪いといふもの、全く反対の立場のものとの対立

我々は国際潮流から置き去りにされる。しかし、将来に向かって、とくに核兵器に対する基本信念とは、大御心をしっかりと抱き続け、運動し続けていく義務があると思ふ。

五十一年近い原爆慰霊の式典は、この昭和天皇の大御心から外れて、米ソ対決の谷間に抗争の具に利用され、西歐の核は良いが共産圏の核は悪いといふもの、全く反対の立場のものとの対立

「野球を愛する私たちは、あこがれの甲子園球場から全国の仲間へメッセージを送り出す。」

大島 目原 節子 暮れゆく西の空に「団の海渡りぬむ西の空に」

赤間 池浦 千鶴子 日陰を恋ひるの間にとび込みて見上げる空の群青のろし



第三九回 宗像大社歌会詠草 中村 吾郎 選

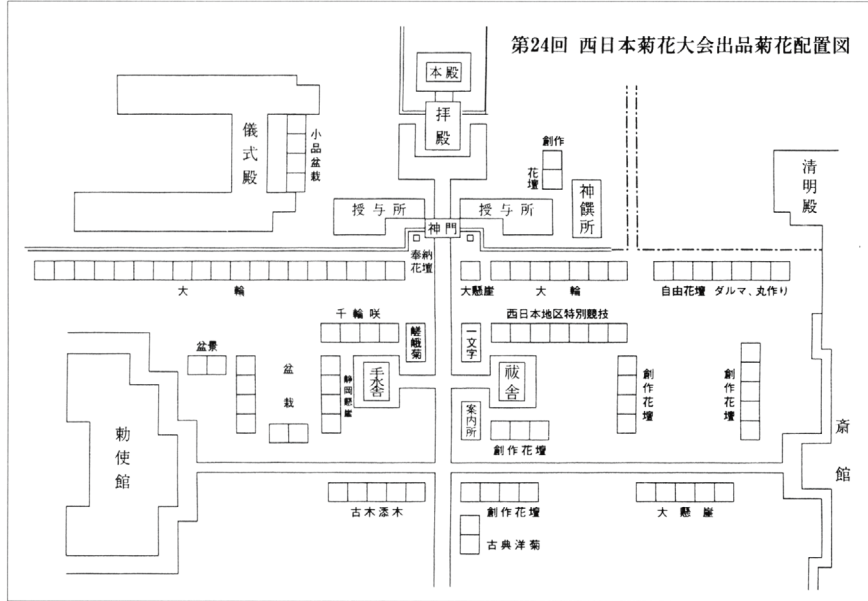
第二十四回

西日本菊花大会開催要項

西日本一の菊花を鑑賞下さい

西日本を代表する菊の祭典、西日本菊花大会は、今年も十月一日(日)から三日(火)まで、宗像大社境内特設会場にて開催される。

本大会を主催する宗像大社菊花会では、一月に松雲四月に理事会、七月に運営理事会、九月に理事会等の会合や打合せを行った。



第24回 西日本菊花大会出品菊花配置図

松井 洋 福園県花キ専門技 術員 樋口茂四郎 日本盆裁協会福岡 支部 藤本 鷹光

出品種目及出品品数 大輪の部、五十一種、六二鉢、懸崖の部、三十種、三鉢、盆裁の部、三十一種、一五五鉢、西日本特別競技九州大会、四十四種、四四〇鉢、特作の部、八五五種、一八〇〇鉢、総計、二五三三、三〇三七鉢

鹿兒島、山口 主催者 宗像大社菊花会、会長 高田太助 後援 福岡県、JR九州、福岡県観光連盟、福岡県農業協同組合中央会、福岡県教育委員会、全日本菊花連盟、近郷市町村外十会団体 審査規定 ①予選審査は各地各会を本会理事がまわり、審査

「宗像市史」発行

宗像市は、「宗像市史」史料編第四巻をこのほど刊行した。

市史は「史籍編」四巻、「通史編」四巻の計八巻で構成され、八年計画で平成九年迄には全巻出版される予定である。

美術工芸と自然科学などを歴史の歩みと共に後世に伝える記録書で、宗像に住む人々に、郷土に対する理解を深めてもらい、これが新しい市の発展の指針となっていくことを大きな目的としている。

現在の学界の成果を踏まえ、学術書として批判に堪えうるものであると同時に広く利用されるよう分かり易い内容にするを旨とした(後記)との言葉より表れている。

社務日誌抄

- 八月一日 月次祭
八月六日 宗像少年の翼参拜
八月七日 宮地嶺神社司宮 二宮久鶴氏司職任
八月九日 KBC-TV「九州街道物語」取材の件にて内田ディレクター 来社
八月十日 朝日新聞宗像支局記者薄野也氏退任挨拶の件にて来社
八月十二日 出光興産株式会社 田幸治氏、国際武道大学教授上野節氏参拜
福岡県農業技術センター 石橋企劃管理部長、太田研治氏参拜
八月十五日 月次祭
八月十九日 宗像護国神社戦没者追悼慰霊祭・千灯明
八月十九日 巡查長末次木樹氏、山田駐在所着任挨拶並同吉田署員転勤挨拶の件にて来社
八月二十一日 アキソフトウェア社長赤木國雄氏電算機業務の件にて来社
八月二十二日 ユニバーシアード福岡大会六人スケッチト米園チーム四〇名来社
八月二十五日 秋季大祭海洋神事打合せ会
八月二十六日 四日市博物館 館長松岡幸司氏来社
八月二十八日 浮羽郡石立神社司宮安達昭長氏他総代十九名参拜
博多消防団大浜分団二〇名参拜
八月二十九日 広島県神社庁筑紫支部長兼出陣神社宮司潮健史氏他五名参拜
風治八幡神社棟宇都宮誠氏本殿再建の件にて来社

『宗像大社文書』第一巻

本書は、表題のように、福岡県宗像郡宗像町に鎮座する宗像大社の所蔵する文書のうち昭和三十三年に重要文化財に指定されたいわゆる八巻文書の翻刻・影印である。重文以外の近世文書若し、および外巻文書にかんする重文外巻撤去の断簡文書も含まれている。所収の断簡文書を除いた総数は、八九通。宗像大社の断簡文書を活字化したものとして、昭和六年刊の『宗像郡誌』所収の「編年宗像古文書」があるがこれには利用上の限界があった。その意味でも、本書の刊行は、まず言え、時を得ている。また言えるのは、本編と影印本との全冊から成る本書は、種々の観点からまがいがなく現時点で最高水準の刊行史料集であることである。本書の校訂・編集を担当されたのは、日本中世史、とりわけ九州中世史研究の造詣が深く、古文書学の学殖豊かな川添昭一、瀬野精一郎、山口隼正の三氏である。現在望まぬ最良の円熟した研究者の共同作業に成る本書



宗像大社文書 第一巻

は、それだけに内容的にも他に類を見ない重厚さと迫力を持っている。川添氏が「解題」で述べられているように、永万元年(一一六五)六月二十九日八条院行下文を最古とする右記一九九通の文書の内訳を時代別にみると、平安時代一三通、鎌倉時代七通、南北朝時代一建武政権期を含む、四十七通、室町時代一八通、戦国時代四十一通、江戸時代一三三通となり、全体の九割強が中世文書といふことになる。文書の種類で言くと、繪巻・院見、つた公家文書、関東御教書、関東下知状といった幕府文書の発した文書、当社の本所・領家の文書、宮司職や社務支配にかかわる文書など、実に多種多様な豊富な文書群であり、それらは同時に宗像大社の歴史に占める位置や役割を如実に物語っている。換言すれば、宗像大社という窓から日本中世史の展開を見通すことが可能とするほどの充実した内容の文書群である。本書の顕著な特徴は、川添氏の「宗像神社史」と

宗像大社歌会 俳句作品集 三七八

ひかりヶ丘 南 萬里
綿菓子のように噴きたす秋の雲

福間 森 清
電柱の影のきらく青田かな

藤 沢 井上 玄洋
海風きて一天雲なし今朝の秋

福岡中央 力丸 玄風
神木に夏雲着ちては崩れ

日の里 花田いつ枝
不意打ちの客を持て成す心太

自由ヶ丘 細川 絹子
山の辺を流るることく蜻蛉とよ

若松 高橋 忠實
夏座敷蜻蛉飛び込む暑さかな

若松 井手 清隆
早稲熟れてあした天気の日照雲



(続)



いししいただし

いまこの島を見ていると四九年前の悲劇を想像することはできないような平和な海と島である。

び船が着くと出迎える人達が家々から次々に出てくるし、車が待っている。港は荷物の運搬がはじまり活気あふれる。

現在座間味村の人口は八五二人(三四九世帯)であるが、太平洋戦争当時は二千三百数十人が島にいたのである。

島の歴史を知るため慶良間海洋文化館に入る。個人経営で、十分ほどの島の概略や展示物についての説明を聞いた。

館に入ったところには、船の歴史になっており、船の模様がずらりと並んでいる。巨大なヤンバル船の模様が流れている丸木船もある。

その周辺には貝類、漂着した漁具類、引き揚げられた焼物類から民具等が雑然と置かれている。隣の一部屋には太平洋戦争の資料類、兵器の残骸、鉄カブト、銃弾や砲弾類から上陸の米軍写真までがあった。更に後方には復元された特攻艇、魚雷、ベトナム難民船、漂着したプラスチック製浮子

ようにとはとほまていつた。水は、水はある。多礼の山懐の二つの大池には満々とたなえられている。しかし、この峡谷の水は谷の入口の巨岩にははまれて平野に流すことはできなかった。



漂着した丸木船、サバニもある。

が水請いの祈禱をしている。その頃、多礼の奥で僧が一人の岩を指して進んでいたが、僧の祈りの真鍮さにとつたれ、その中、老若男女と共に村人が巨岩の前を歩いていた。そして読経の音は幾日も続けた。

この海唇周辺から完形の陶磁器類も引き揚げられていた。一つはニューギニアあたりからのものという巨木を削り抜いたもの大きい。もう一隻は、底部の部分がしなれ残っていないものであった。

さて一体、座間味島にはいつ頃か人々が住みはじめたのだろうか。島の東南海岸の砂丘地に古座間味貝塚がある。ここは一九八〇年、八一年に発掘調査がされ、本土の縄文時代前期に位置する時期頃のものとされている。貝塚は一区から三区に分けられ、一区は縄文後期、二区は縄文前期、三区は縄文晩期から弥生前期頃で、平地式住居跡(楕円形)が確認され、その貯蔵穴に二、三個のゴホウラ、貝匙や黒曜石片が保存さ



特攻艇、難民船などが

なかも、特に「鏡」を祭祀奉獻品として多く用いている16号・17号・18号・19号遺跡と呼ばれる祭壇は、祭場群の中央部で、巨岩群の最上部にある1号巨岩を中心に行われていた。

内行瓦文鏡、方格規矩鏡、三角鏡、龍鏡、獸帯鏡、人物画像鏡、など二十一面の鏡が出土してきている。

沖ノ島祭祀に奉獻された鏡の総数は、今五十九面を数えているが、中でも17号、18号、19号の三箇所に近い奉獻の量を示す最大出土をみる祭壇がある。

この平坦上に南北二八m×東西二五mの長方形型をした石組の祭壇が設置されている。祭壇の外面ラインにはやや大き目の石塊を並べ、内側には小石を全面に敷きつめて、祭壇を平らにしている。また外側の四隅には大きな石を配している。祭壇の中央部に二まわり程の高さを置いてある。これは神祭りに際しての神が降臨したまじり座である。いわゆる依代として設置されたものでありと考えられる。

宗像むかしばなし 津瀬山瀧

村の北七町瀧口にあり、高一丈三尺、幅一丈四尺。水源深谷、牟田谷、ウツキ谷、大鏡谷四調より出づ。流注一町に及ばずして、釣川に入る。

木枯が広野を吹いていた建仁三年暮、盲僧が一人、琵琶をかかえ衣のすそを風に舞わせて釣川沿いの往還を下つて来た。半刻後彼の姿は、田島さまのほとりの堂宇の前であった。ここには先年宗の首王山より平重盛道善のため送られてきた阿弥陀石と経巻が納めら

れている。琵琶を弾けること数刻僧の姿はそこにこたえた。その日より水の間彼はヒョウゼンと現れ弾じ完えるやいずこともなく去つていった。村人等は彼を阿弥陀坊主、琵琶坊主とも呼んでいた。夏が近づくとその年は雨が少く田島はかわきまっていた。水が欲しい。一滴の水でも、水は釣川の底をわずかに流れていた。人々はそれを汲み上げ田島に注ぎ、せめてもの心の慰めとした。盲僧はその話を聞き肩をくもらせ何時もの

その間、川では頼みの綱の釣川の水もついに涸れ果てた。水争いの必要もなくなった。水争いの必要もなくなった。水争いの必要もなくなった。

うとしてその行方が知れなかつた。ただ彼が平生口ずさんでいた平曲が月明の夜には琵琶の音と共に瀧口より聞こえるという。



岩上における祭祀 沖ノ島の古代祭祀場は、島の南端にあたる九州本土の方を向いた谷間の裾野にあり、島で一番広い平野で行われてきた所であり、今、沖津宮本殿の鎮座地である。岩上祭祀は沖ノ島の最初の祭りの形態であり、祭場が並ぶ巨岩群の最上部にあたる。

岩上祭祀が収積しているI号巨岩より20m程南に下がった所に位置している、F号と呼ばれる巨岩の岩上に作られた祭壇は、祭壇の高さはそれほどの高さではないが、岩上が南から北へとゆるやかに傾斜し、低い方で五mを計る。なお岩上は低い北側が未だがり状に広がっており、高い南側からは眼前が海に向つて開け、小屋岩・天狗岩・御門柱と見下すことが出来る。

た外側の四隅には大きな石を配している。祭壇の中央部に二まわり程の高さを置いてある。これは神祭りに際しての神が降臨したまじり座である。いわゆる依代として設置されたものでありと考えられる。

奉獻品の出土は割りと少なかつたが、中央の大石に向つて鏡・刀剣・玉類を供えている。鏡は伯載の古式の大形手持勾玉、碧玉製車輪石、玉製車輪石、硬玉と碧玉の勾玉や管玉、ガラス製小玉、玉類は同様な物が滑石でも作られ供えられている。鉄製品は原料材である鉄銑と一緒に、朝鮮式と呼ぶ他、刀剣類・銅・磁手刀子、鍛造銃剣等あり、工具類などの鉄製利器も見え、ここで

